

年輪年代学用木材標本リスト

年代学研究室では、2015年度、年輪年代学用木材標本の整理を重点的におこない、現生木材標本についてのリストを作成して「埋蔵文化財ニュース162号」として出版しました。年輪年代学では、年輪が形成された年代を誤差なくあきらかにすることができますが、そのためには年輪の形成された年が明確な現生木から遡った年輪変動のデータを蓄積する必要があります。そのため奈良文化財研究所では、文化財ではなく自然史標本の範疇に入るともいえる年輪年代学用の各種木材標本を多数、収集してきました。この標本群は、我が国において年輪年代学の応用が成された根拠を示す証拠としての役割を担い、再現性を保証する重要なものであると同時に、昨今の森林事情を考えると現在では入手困難なものも多いため、これらを収蔵し、リストを公開する意義はとても大きいものだと考えています。

今回報告したのは、2016年3月までに整理した現生木材標本870点ですが、今後も標本数・内容とも充実させていく予定です。本標本は、年輪年代学を目的として収集された特徴的なもので、高樹齢の樹木の樹幹を輪切りした円盤状の形状をしています。このような木材標本がまとまって収蔵されている例は少なく、森林科学や自然史学等多方面での活用も期待できる貴重な標本群であるといえます。また、円盤状の樹幹の輪切りは、一般に年輪をイメージしやすいことから展示品として活用されることも多く、この夏には大阪市立自然史博物館の特別展「氷河時代—化石でたどる日本の気候変動—」でも本標本群からの展示が予定されています。ぜひ、この機会に、ご覧いただければと思います。

(埋蔵文化財センター 星野 安治)



大型木材標本の収蔵状況

全国遺跡報告総覧シンポジウムの開催

2016年2月18日、埋蔵文化財の発掘調査報告書をインターネット上で検索・閲覧できる全国遺跡報告総覧のシンポジウム「文化遺産の記録をすべての人々へ！—発掘調査報告書デジタル化の方向性を探る—」を島根大学附属図書館と共に開催しました。全国遺跡報告総覧とは、発掘調査報告書のデジタル化とその公開を目的として、全国21の国立大学附属図書館が連携して取り組んできたプロジェクトの成果を、奈良文化財研究所が引き継いで公開したものです。

シンポジウムでは、水ノ江和同氏(文化庁文化財部記念物課)による基調講演で、報告書のデジタル化についての基本的な考え方方が述べられました。続いて菅野智則氏(東北大学埋蔵文化財調査室)、石坂憲司氏(信州大学附属図書館)、中鉢賢治氏(静岡県埋蔵文化財センター)、宮崎敬士氏(福島県教育庁文化財課南相馬市駐在)の各氏による事例報告がおこなわれました。事例報告では、大学・大学附属図書館・公立調査機関・自治体のそれぞれの立場から、現在の取組や課題が報告され、全国遺跡報告総覧に参加を検討している機関の担当者にとって参考となりました。

最後におこなわれた小滝ちひろ氏(朝日新聞編集委員)のコーディネートによるパネルディスカッションでは、事前に会場から回収した質問票にもとづき、議論が展開されました。

自治体の文化財担当者を中心に、考古学の大学教員や図書館関係者等多方面から約80名の参加がありました。参加者からは「報告書の公開方法等今後の参考になった」との感想をいただきました。予稿集や当日資料もWEB公開していますので、ご興味があればぜひご確認ください。

全国遺跡報告総覧(<http://sitereports.nabunken.go.jp>)

(企画調整部 高田 祐一)



シンポジウム パネルディスカッションの様子